

暦こよみの上では春が来たといいますが、まだまだ寒い日が続いています。北国の山には雪が残り、吹く風が肌に冷たいこの季節、いち早く春の訪れを知らせてくれるのが梅の花です。

服部嵐雪はっとりらんせつが詠んだ、「梅一輪いちりん いちりんほどの暖かさあたたか」という俳句があります。

冬の寒さに開く梅の花の一輪が、あたかも「いつまでも冬ではないよ」と、春の訪れをいち早く私たちに教えてくれているようです。

梅は、突然に花を咲かせたわけではありません。春が訪れ、私たちが梅の開花かいに気付くそれ以前に、梅は厳しい寒さの中に身を置いていました。私たちが寒い寒いと言いながら冬の日々を送るその一方で、梅は春の開花に向けて、寒い冬の中着々と準備を進めていたのです。

梅は、その花を咲かせて私たちに春を告げるためではなく、冬の日々を、まさに「梅らしく」成長を続けていたのです。花が咲く日まで気づかれることもなくひっそりと、しかしながら、花を咲かせなくても一日一日を着実に梅としての姿を全まうしていく、そのはたらきが「梅らしさ」であり、私たちに惹きつける魅力の一つであるといえるでしょう。

私たちにとって、自分らしくあるということは、どういうことなのでしょう。それは、「今」「ここ」をいきいきと生きることではないのでしょうか？

しかし、自らの心の中を覗いてみると、過去に留とどまったり、未来を不安に思ったり、心ここにあらずというように、「今」「ここ」に生きることは難しいものです。

この難しさに目をそらさず、今のこの瞬間をかけがえのないものとして「今」「ここ」にその姿をとどめる日々を重ねていくためには、私たちに、不断の努力が求められます。

その努力を仏教では修行といいます。修行により、私たちの過ごしている日々は、ただ繰り返す毎日ではなく、一日一日と季節とともに前に進んでいく確実な歩みとなっていくのだと思います。

春が来たから梅の花が咲いたのではなく、花が咲いて春が来たといえるのかもしれません。